ヒトのことばと鳥の歌

ジュウシマツやカナリアなどのある種の鳥は縄張りを主張したり、求愛のときに、まるで歌を歌うかのようにさえずる。次から次へと新しい「歌」を覚えた結果、100以上の「歌」が歌えるまでになる鳥もいる。鳥はヒトと同じように、音声という手段を使ってコミュニケーションをとっているのである。では、鳥にとっての「歌」とヒトにとっての「ことば」に違いがあるのだろうか。

ヒトの「ことば」と鳥の「歌」の習得過程において、似ている点が三つ挙げられる。１点目は、まねるという経験を通して「ことば」や「歌」の学習をするということである。ヒトの子供は聞こえてくる周りのことばをまねることで「ことば」を習得していく。鳥も同様の過程を経て、「歌」が歌えるようになっていく。つまり、成鳥の「歌」を一度も聞くことなく育った鳥は歌うことはないのだ。２点目は、人間の子供も幼鳥も繰り返し練習することで、「ことば」や「歌」を習得していく。人間の乳児が、「バブバブ」などの音声を繰り返すのは幼鳥が最初に「歌」の一部分を繰り返すのと同じだ。３点目、人間の子供も幼鳥も新しい「ことば・歌」をたやすく学習できるが、大人や成鳥は子供に比べて学習に時間がかかる。人間の親子が同時に外国語を学び始めると、子供のほうが早く

上達することはよく知られているが、鳥にも同じことが言える。

また、習得過程以外にも似ている点がある。鳥の「歌」にヒトの方言にあたるようなものがあり、同じ種類の鳥でも、生息している地域によって歌い方が異なる。

しかし、ヒトの「ことば」と鳥の「歌」とには異なる点もある。鳥の「歌」は縄張りの主張や求愛のために歌われるのに対し、ヒトの「ことば」はそれ以外のさまざまな目的にも使われる。また、鳥の「歌」では音の順番を変えても「歌」の意味が変わることはないが、ヒトの「ことば」では、単語の順番を変えることで文章の意味が変わる。

なぜ、異なる種であるヒトと鳥が音声という手段を使ってコミュニケーションをとるようになったのだろうか。鳥は木の上では葉や枝に視界を遮られ、コミュニケーションの相手が見えなくなってしまうので、音声を進化させコミュニケーションをとるようになったと考えられている。ヒトにも同様な点があるのではないかという説もある。